

かれんと

No.32

2008.2.25

Current:カレント

時代の流れあるいは
新しい潮流

仲間と夫婦

支えあう舞台で夢を

生きているって楽しい そんな日々を送りたい

支え合う仲間がいれば

楽しさも二倍になるに違いない

お互いの時間ときのなかに認め合う気持ちがあれば

人は優しい笑顔で輝くだろう

夢の実現のために

「今、つかもっ！輝くわたし」



主な内容

- ・仲間と夫婦
- ・女性たちが経営する花農場
- ・趣味を活かし夫婦そろっていきいき生活
- ・県次世代人材づくり事業参加報告
- ・男女共同参画社会づくり実行委員会事業
- ・お気に入りBOOK
- ・ひとくちメモ
- ・編集後記

※「かれんと」は、ボランティア編集員が担当し、作成しています。

女性たちが経営する花農場 「人生の経験が生きて、今」



▲スタッフのみなさん 花に囲まれて

市街地から車を走らせること30分。目の前に広がる山々。穏やかな空気が漂う中粕尾。ここに元気に活躍している女性たちがいると聞き、今回、取材に行ってきた。

有限会社花農場あわの。四季折々の花を無料で見ることができ、女性に人気のスポットです。

取材当日、農場の花畑には、大輪百日草・コスモス・メキシカンブッシュセージが咲き、訪れる人たちの目を楽しませてくれていました。

しゃれた洋風の建物はレストラン。ここでは新鮮なハーブや野菜を使った料理を楽しめます。

代表の若林ふみ子さんは、花農場を始めたきっかけをこんなふう

に話してくれました。
「都内のイベントで地元産の野菜を販売したとき、虫の付いた野菜やイボイボのあるキュウリ、曲がったダイコンなどが新鮮じゃないと思われてしまい、売れ残りを持ち帰ってきた経験があるんです。本物の野菜を知ってもらいたいという気持ちが生まりましたね」



▲熱心に語る若林さん

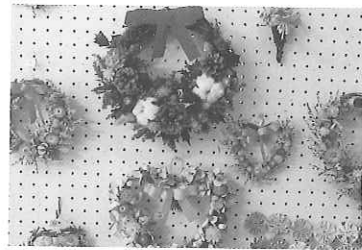
今では地元のみならず、首都圏や遠方から足を運ぶ人も多いのですが、はじめから順風満帆な滑り出しではなかったといえます。花農場をたちあげるに至っては、

すぐに家族の理解が得られたわけではありませんでした。けれども、現在ではトラクターを持ち込んで農場の手入れを手伝ってくれる「協力者」となりました。それは、若林さんたちの頑張りを一番身近で見てきたからこそ……。

今でも月に一度は、料理を指導してくれたシェフの元へ行き、味のチェックと季節の野菜に合う新作料理の勉強をしているそうです。

スタッフは8名。厨房・レストランフロアー・ショップ講習会・農場と主な担当は決まっていますが、誰もがすべてを把握しているといえます。理解し支えあい、常に向上心を忘れないこと。それが2年の準備期間を経て、9年ものあいだ花農場を支えてきたパワーの源ではないでしょうか。

「お客さんと接することが楽しいですね。また来るよ、おいしかったよ。そういつてもらえることが一番嬉しい」



▲ドライフラワーのリース

▼ハーブティー



今後、レストランでも好評のトマトソースを瓶詰めにして売り出す予定とのこと。
「人生の経験が生きて、今があるんです」

若林さんのその一言に、きらり輝く秘訣がかくされているように感じました。



▲押し花教室

花農場あわのでは、ハーブ教室・手工芸教室などの体験教室やイベントが行われています。取材日はちょうどクリスマスリースを作る教室がありました。お友達と2人で参加の東末広町にお住まいの女性性は

「子どもが一歳になったので、自分への褒美にやってきました」と出来上がったばかりのリースを見せてくれました。



▲クリスマスリース作り

趣味を活かし 夫婦そろっていきいき生活



かのかん 香音ちゃん (5歳) かなと 奏音くん (2歳)

同じ人生の舞台に

劇団『遊幻空間』に所属している川崎さんご夫婦。高校時代に演劇を通して知り合ったという、松原にお住まいの祐也(29)・さとみ(29)さん。

「高校は別だったんです。演劇をやっていたら、出会う事もなかったかも」と笑顔で答えてくれました。

別の活動をしていたら、理解できないことも多いはず。劇を通して、時間を共有することが2人にとっては自然体ようです。劇の話になると目を輝かせる川崎さん。劇にはどんな魅力があるのでしょうか？

「一言では語れませんが、自分ではない自分を感じることに、みんなで一つのものを創り上げる喜びかな？やみつきです」家庭の話題は劇の話が多いそうです。いつの間にかミーティング開始なのだとか…。



▲鹿沼市民文化祭などで公演活動をしている劇団「遊幻空間」の皆さん



こんな話をしていても、実は本業はサラリーマン(夫)。子育て真最中の2児のお父さんとお母さんでした！
当然、家事や育児は大忙しのはずですが？
「取り決めはないんです。暗黙の了解？お互いを思いやる気持ちから自然にやっています。子どもはパパっ子なんですよ」
そんなお2人に将来の夢を伺いました。
「今のままで充分ですが、歳をとっても一緒に活動したいです。何か子ども向けの劇にも挑戦したいです」と話してくれました。

絵の具とカメラで

御成橋町2丁目在住の島方正敏・則子さんご夫婦は、お2人とも数年前に仕事を退職され、3人の娘さんも仕事に就き、現在は趣味を活かした生活をされています。

その趣味は幅広く、正敏さんは絵画はもちろん野鳥観察や水泳など、則子さんは写真やピアノも楽しんでいきます。
また、2人で共通の趣味も持とうという事で、最近は何事も始め、特に則子さんは今一番熱中しているそうです。

一方、家事について何うと？
「10年ほど前から食事や掃除など夫にも始めてもらいました。お蔭で今では安心してひとり旅に出かけるようになりました」



夫婦仲良く、趣味を活かした生活のコツを伺うと？
「趣味でもお互いに自立して、余計な干渉はしないこと。やろうと思ったことは、自ら積極的に参加活動することもポイントだと思います。これからは健康長寿をモットーに、2人で生活していきたいと思っています」
趣味も家事もお互いを認め合っていて、未永くご活躍されることでしょうか。
絵を描いたり、写真を撮ったりしているお2人の表情は、いきいきと輝いていました。

男女共同参画社会づくり実行委員会事業



宝井琴桜さん



地域セッションin加蘇

地域セッション開催
平成19年8月に設立された実行委員会により、10月に学習会「地域セッション」を、板荷・加蘇・東部台の3地区で開催しました。地区自治会協議会の協力を得て、男女共同参画についての普及啓発を実施。各地区では「地域で自分らしく、いきいきと生きるために」と題して、県総合教育センターの丹治先生、船山先生の講話を基に話し合いました。参加者から「物事を前向きに捉えよう」と心がけたいと思いました」などの声が聞かれました。

ときめき鹿沼2007
11月17日(土)市民情報センター5階マルチメディアホールにおいて「女もいきいき 男もいきいき」と題して、講師の宝井琴桜さんの講演会を行いました。
男女共同参画社会について「性別だけで物事を決め付けると窮屈だから、もっとしなやかにその人の個性を認めていきましようという社会」と、琴桜さんは力説。
参加者からは、「琴桜先生のお話は大変わかりやすく、男女共同参画の必要性がよくわかりました」と好評でした。

栃木県次世代人材づくり事業に参加

平成19年11月26日～12月1日 中華人民共和国



豫園



石田さん 山市さん

御成橋町 山市 敦子
男女共同参画社会とは、全てにおいて「真心」だと感じます。相手の立場に立って思いやる心と、言葉かけ。地球を思いやる態度がエコロジー。人間にしかできない大切なことだと思えます。私の知らない世界(施設や生活)や、想像できないほどの困難な現実があることも見ることができました。
西湖は美しい緑豊かな町。杭州は、街並み、家、学校、交通、食事、トイレ全てが、想像よりはるかに上級でした。中でも超上級だったのは思いやりの心です。
この経験を生かし、ヒトの模範となるヒトより、ヒトの役に立つヒトになれるようにと、次世代人材づくりへの思いを深くしています。

南上野町 石田 明美
研修会に参加して、私自身の物の見方が変わり、視野が広がり、大きな学びとなりました。
訪問先中国では、夫婦共働きが多く、夫は仕事先から帰宅後、夕食の支度をするのが日常当たり前のことです。また、家庭生活の支援をビジネスとして発展させて、夫を部下にして活躍する女性もいました。その現状は、「ワーク・ライフ・バランス」女性として、人間として生きやすい社会に」という課題に対して大変参考になりました。
これから地域でどのような活動ができるか分かりませんが、今回の体験を生かし、まずはできることから始めようと考えています。

ひとくちメモ

ワーク・ライフ・バランス

「仕事と生活の調和」と翻訳され男女がともに、人生の各段階において、仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動を自らの希望に沿って展開できる社会の実現を目指している。

内閣府男女共同参画局
ホームページより

出会えた仲間・家族に日々感謝です。ありがとう(黒ちゃん)
取材させていただいた方々の輝きは刺激的！私も謙虚にがんばろう！(みかん)
キラリ輝く自分をめざし仲間と一緒にパワーアップ(めだか)
あくまでも楽しく、いつまでも長く続けるのが趣味の本領。これを夫婦そろって出来れば素敵かな？(くに)

編集後記



お気に入りBook



「95歳からの勇気ある生き方」



著者 日野原 重明
出版社 朝日新聞社

96歳、文化勲章受賞・聖路加国際病院理事長の著者がつづるエッセイ集。今の医療現場に望むこと、習慣を身につけること、老いてもゆとりをもって生きること、出会いを大切にすること…。超多忙な日常から幼少期の思い出、人生初のディズニーランド体験記まで、今もなお前進しているとおっしゃる日野原さんの生き方に勇気を頂ける本です。